


 巻頭言

人工知能の多次元化

瀧 一 博*



人工知能 (AI) をめぐる活動が活発化してきた現在、1つの尺度でそれを測るのではなく多次元尺度が必要だろうということをこのところ繰り返し言っている。トリビアルな意見だが、議論の紛糾をときどき見かけるのでそんなことを言いたくなるのである。

平凡な分類だし、ほかの人も言っていることだが、1つの尺度、切り口は「科学」としてのAIである。第2はAI手法の「実際的应用」である。第3はAIモデルの実現体系である。少なくとも3つは必要だろう。

いまのAIブームは第2の側面がビジネス化とからんで発現したものといってよい。ただビジネス的観点からだけでなく、技術史的観点からも画期的な時期だったと見てよいと思われる。この見方が正しいかどうかで、いまのブームがあだ花か、定着の前の興奮なのかに分かれるだろう。

第1の科学的側面はブームなのだろうか。知的機能の構造を解明するという課題はまだ数十年や100年の単位で努力するべきものだろう。という、いまの日本ではすぐにはやらなくてよいという話に短絡しそうだが、そうあってはならないだろう。この部分はいまもっと意識的にエンカレッジされなければならないと思う。

幸い当学会も発足したことである。学会であるからには科学的・基礎的な研究を促進するものであろう。

応用体験もまた重要である。当学会が経験を蓄積し、いずれはそれを昇華させる母体になることも期待したいところである。いまのAIを一種の体験ブームととらえてよいならばこれは大いに結構なことである。いまのブームを支えているのはどうやら、いわゆるユーザ側での体験活動のようである。そうらしいということに気がついて、このブームはかなり健全なものだと思うようになった。

その反面、AIツール提供側の状況がむしろ気になるところである。売り込みに誇大宣伝がつきものなのはいまの社会ではあたりまえだろうし、ユーザ側は、いまやもっと高い見識を持つようになってきているようだから安心していてもよいのだろうが、AI応用ツールが既存の手法からの切り抜きにとどまるならば、技術的限界も近いだろうし、とくに日本の場合、技術輸入という例のパターンの繰り返しということにもなりかねない。

好ましくない循環から抜け出す1つは、蓄積されつつある体験からツールへのフィードバックがどう有効になるかだろう。それにはツール提供側の自発的な向上努力が必要になる。このフィードバックは研究そのものといってもよい。かたや科学的深化の努力とのコンビネーションも重要になる。この辺のサイクルがわが国でどう確立されるか。財テク風でないAIブームが望まれるところである。

第3の側面は、「第五世代コンピュータ」プロジェクトをやっている立場の人間の発言として我田引水と周囲から見られかねないが、重要なポイントだと思う。AIツールから現在のコンピュータの見直しはもっと進んでよいと思う。コンピュータユーザがAI化に心を寄せているのは、単に新しがりとか実利ではなく、現在のコンピュータの技術体系への批判からなのである。場合によっては無意識的な批判であったり、まだ全体系の改革の要求までは至っていないのであるが、その声なき声に耳を傾けるべきであろう。

AI活動が大きくなるにつれ、その内部も分化してくる。それぞれを育てることが必要になるとともに、それぞれを連携させ、全体を大きく発展させる意識を持つことが重要になる。AIの中における専門化、深化と、AIの中における学際的活動が重要になる。その両面で当学会の発展に期待したい。と同時に他の関連学会との有機的な連携プレーを期待したい。それがAIを大きく健全に育てていく条件の1つになるだろう。

* 財団法人新世代コンピュータ技術開発機構研究所所長